

医学教育に対する非医療者の認識に関する研究

A study of non-medical persons' views of medical education

研究代表者：大滝純司 東京医科大学 教授

Junji Otaki, Professor, Tokyo Medical University Hospital

共同研究者：高屋敷明由美, 大野每子, 松村真司, 福土元春

Ayumi Takayashiki, Maiko Ono, Shinji Matsumura, Motoharu Fukushi

【要旨】医学の進歩は目覚ましい。社会の高齢化や権利意識の向上などにより、市民の医療に対する関心も高まっている。しかし、医師がどのように養成され、どのような能力を持っているのか、医療関係者以外(非医療者)の市民が知る機会が少ない。この点において、医療者と非医療者の間には情報格差があり、認識や価値観が大きくずれている可能性が高く、医療不信の一因となっているように見える。本研究では、医学教育の内容や、それが生み出す医師の能力について、非医療者がどのように理解・推測し、また、要望・期待しているかを、特に「医学部での教育」「医師国家試験」「卒後初期の臨床研修」を中心に明らかにする。更には、海外の医学教育者との共同研究により、このテーマに関する国際比較を行う。この研究の成果は、非医療者と医療者の間の相互理解を促進し、医学教育が社会にとってより望ましい方向に変化していくことに資すると期待される。

Abstract: With the progress of medical science, the aging of society, and the patients' rights movement, people have become increasingly interested in their own medical care. Despite all this attention, it is hard for a layperson to decipher the system of medical education or accurately judge the skills and capabilities of a specific doctor. There remains an enormous disparity of information between medical professionals and the public at large in this important area. The resulting gap in understanding and communication creates a likely environment for discontent and distrust. This research project will attempt to clarify the perceptions and attitudes of the lay public in their efforts to understand the process of medical education and evaluate the abilities of medical professionals. It is hoped that this effort will lay the groundwork for bridging the information gap in these areas and promote a climate of mutual trust that will benefit our healthcare system as well as our efforts to educate humane and capable doctors.

1. 研究目的

本研究では、医療関係者以外(非医療者)の市民が、医学教育に関してどのような認識や価値判断を持っているかを調査することを目的とした。特に、医学教育の内容や、その結果として生み出される医師の能力に関する、非医療者の理解・推測・判断・要望・期待などを明らかにすることを目指した。

医学教育の中にも様々な領域があるが、本研究では、医学教育や医療全体を改革していく上で特に重要と思われる「医学部での教育」「医師国家試験」「卒後初期の臨床研修」に的を絞った。

本研究は、言わば、消費者(受益者)の意見を専門職者に伝えようとしたものである。非医療者の認識と医学教育や医療の実態との違いを調査・検討し公表することにより、非医療者と医療者の相互理解を促進し、今後の医学教育の改革に資することを目指した。

研究手法の点では、認識や価値観など、数値化することが困難な事象を検討する場合に特に有用だとされている「質的研究手法」も用いて、具体的で妥当性の高い研究結果を得ることを目指した。

2. 研究経過

[申請前]

本研究は、文部科学省の科学研究費補助金を獲得した平成 13 年度から研究活動を開始し、継続的・段階的に進めた。

資料の検索・収集・分析や小規模な予備調査を行うと共に、共同研究者間で議論を繰り返しながら研究計画の見直しを行った。

平成 14 年度後半からは、質的研究の代表的な手法のひとつである focus group interview(話題を特定した座談会的な集団面

接、以下、FGI とする)を用いて、非医療者の医学教育に対する認識の一端を抽出する目的で、一次調査を計画・実施した。予備調査の結果や共同研究者間での議論をもとに、FGI の具体的方法を検討し、研修医を対象に 1 回、患者や地域住民を対象に 2 回の FGI を行った。

この一次調査の結果を分析している段階で、この研究活動の重要性と幅広い展開の可能性を再認識し、研究活動を継続させる目的で、当研究費を申請した。

[平成 16 年度]

当研究費を獲得できたことにより、研究活動を加速・拡大させた。

前年度までに行った一次調査(FGI)の分析結果を、日本医学教育学会の年次大会で、2 題の演題にまとめて発表した。

一次調査の結果をもとに、非医療者の医学教育に対する認識の傾向をより大規模に検討する目的で、二次調査(全国多施設調査)を計画した。対象は国内の研修病院の内科通院患者とし、10 カ所の病院を層別・無作為抽出した。二次調査で用いる質問項目を研究者間で検討した上で質問紙の原案を試作し、某病院の内科外来患者を対象に予備調査を実施した。その予備調査の結果を分析して質問紙を改良し、二次調査を実施(回答者数 521 名)した。

[平成 17 年度]

前年度に実施した二次調査(全国多施設調査)の結果を解析し考察を加え、日本医学教育学会の年次大会において、3 題の演題にまとめて発表した。

非医療者の医学教育に対する認識に関して、文献検索や海外の医学教育研究者と議論を重ね、この研究テーマでの国際比較研究の可能性を検討した。類似した研究報告は少なく、独創的で重要な研究テーマであることは確認

できたものの、言語が異なる海外でこのような調査研究を実施するには、国内での研究に比べてはるかに膨大な研究費と時間を要することが予想されたため、当研究費の枠の中で実施することは困難であると判断した。

これまでの研究成果をもとに、研修医に関する情報や指導体制が非医療者に及ぼす影響などを明らかにする目的で、国際比較研究に代わる、当研究費の枠内で実施可能な調査研究を検討した。その結果、二次調査よりも更に幅広い非医療者を対象としたインターネット調査の計画を開始した。

[平成 18 年度]

前年度に計画を始めたインターネット調査について、質問項目の検討や予備調査などを行った。その結果をもとに質問項目を仕上げて実施した(回答者数 3093 名)。その結果を解析し、平成 19 年度の日本医学教育学会の年次大会に、2 題の演題を応募し採択された。

当研究に関する、今後の国際比較研究の可能性を更に検討する目的で、医学教育の国際会議(アジア太平洋医学教育会議)に参加し、二次調査の研究結果を中心に当研究の成果を発表し、アジア太平洋地域の多くの研究者と議論を深めた。また、今後の当研究活動の方針について、共同研究者と議論した。

3. 研究成果

一連の研究活動により、非医療者の医学教育に対する認識の多様性や現状との食い違いに関するいくつものことを明らかにできた。

[予備調査]

個別インタビューからは、「研修医が身につけている能力」と非医療者が認識している項目として、紹介の必要性に関する判断、上級医の下での当直、レントゲン読影、心肺蘇生、

虫垂炎の手術、骨折・脱臼の処置等が抽出された。

[一次調査]

研修医を対象とした FGI からは、「研修医にはできる」であろうと非医療者は認識している一方、研修医自身は「できない」と認識している項目として、病気・薬の全般的知識、日常生活の指導、身体診察、治療方針の説明、画像診断、他医療職種の知識・技術が抽出された。

一般住民を対象とした FGI からは、研修医の能力に対する認識が、①研修医という呼称に対する理解、②研修医の能力に対する評価、③医学教育・研修システムに対する認識、④研修医との接点に対する印象、の 4 点にカテゴリー化された。①～③では、現実と異なる認識が多く、また④では研修医と接することに対する信頼と不安の両面が抽出された。これらの現状認識とは別に、研修医の能力に対する要望も、コミュニケーションや態度面を中心として抽出された。

[二次調査]

研修病院の内科通院患者を対象とした二次調査(全国多施設調査)からは、研修医に診療されることに対して否定的な意見が多いこと、医師国家試験で実技試験が行われていないことを認識していない患者が少なくない(約 42%)ことなどが明らかになった。

[インターネット調査]

医療従事者を除く 20 歳から 69 歳までの成人男女を対象としたインターネット調査からは、研修医の診療に対する受容度が、受診時の状況や指導体制により大きく異なること(図)、9 割以上が医師国家試験に実技試験を導入する必要があると認識していることなどが明らかになった。

4. 今後の課題と発展

これまでの研究の成果は、学会などで発表すると共に、論文として投稿し、既に2編が掲載されている。今後も二次調査やインターネット調査の結果を中心に論文を投稿すると共に、インターネットなどでも研究結果を公開していく予定である。

我々は今後も、医学教育に関する非医療者の認識というテーマで研究を続けたいと考えている。国内を見ても、世界的に見ても、医学教育の場を、大学病院の内側にとどめず、地域の様々な医療活動へと広げていくことが

課題になっている。医学生が地域に入り地域で学ぶことに関する患者や住民の認識について検討していきたい。

5. 発表論文リスト

- 1) 高屋敷明由美, 福士元春, 大野每子, 松村真司, 大滝純司: 卒前医学教育に対する一般住民の認識に関する探索的研究. 日本医事新報 4243: 25-31, 2005
- 2) 福士元春, 高屋敷明由美, 大野每子, 松村真司, 大滝純司: 研修医は何ができると思われているのだろうか. 医学教育 37: 89-95, 2006

図：研修医から診療を受けるときの重視点【事例A・B・C】

「研修医から診療を受けるときに重視する項目」の質問に対して「とても重要である」と回答した人の割合を、3事例別に折れ線グラフで示す。

